

【入り口・雑誌棚】

サンブックス浜田山

(東京都・杉並区)

本屋といえば、「本」の一字を大きくあしらった看板を思い浮かべる人も多いだろう。屋号よりも目立つ「本」の看板は、全国共通の「町の本屋」の目印である。

入り口にドアがなく、常に開放しにしている店もあるが、現在では、空調の関係もあり、ガラスドアになっていることが多い。商業施設内の店では、通路側の開放部が広くとられ、とくに「入り口」が設けられていない店もある。万引防止のゲートが設置されていることもある。

入り口の脇には、週刊誌・コミック誌など雑誌類の並ぶラックが設置されている。表紙が見えるように差す棚と、平積みにして並べる平台とがあり、両方を組み合わせていることも多い。そばには、子ども向けの絵本、とくにボール紙製のものや、学年誌などの児童向け雑誌を差す回転ラックが以前はよく見られたが、最近は数を減らしている。店外に置かれた雑誌棚が目に入ると、つい足を止めてしまう人が多いのは、雑誌棚が店の広告塔のような役目も果たしているからである。

サンブックス浜田山は、一見ふつうの駅前書店だが、一歩中に入ると、「ちくま学芸文庫全点フェア」や「平凡社品切れ本フェア」など意外なものが待っている。棚に並ぶ人文書などのかための本は、立地や規模を考えると多すぎるくらいだ。今も毎週の神田村での仕入れを欠かさないという店主が選書にかける思いが、ちゃんとお客さんに伝わっているからこそ、こうした棚や先にあげたようなフェアが成立するのだ。本好きをうならせる、東京の隠れた名店である。

